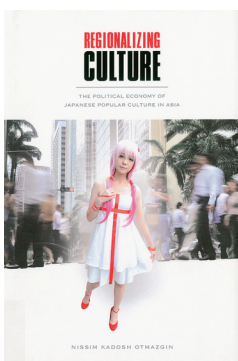


ニッシム・K・オトマツギン著

『リージョン化された文化——アジアにおける日本発ポピュラー・カルチャーの政治経済学』

Nissim K. Otmazgin. *Regionalizing Culture: The Political Economy of Japanese Popular Culture in Asia*. University of Hawai'i Press, 2013



山田奨治

本書は、日本発のポピュラー・カルチャー（以後、JPC）が東アジアに広がった過程に産業側の観点からアプローチしたものである。著者はJPCによる東アジアの「リージョン化」がもたらした／もたらすものを、「外部」からの視線で論じている。

こうした観点・立脚点は、JPCを論じた幾多の書物なかでも光彩を放っている。二〇〇三年頃までの国内マンガ市場に限った産業論では、中野晴行の『マンガ産業論』（筑摩書房、二〇〇四年）があるが、本書はそれのJPC全般・東アジア・二〇一二年までの拡大版と位置付けることもできよう。

英語で発信する著者によるJPC、とりわけその代表格であるアニメに関する近年の研究書には、大きくわけると三つくらい

タイプがある。第一は、Ian Condryの*The Soul of Anime: Collaborative Creativity and Japan's Media Success Story* (Duke University Press, 2013) と、Anne Allisonの*Millennial Monsters: Japanese Toys and the Global Imagination* (University of California Press, 2006) に代表される、文化人類学の現地調査・参与観察によるものである。第二は、Thomas Lamarreの*The Anime Machine: A Media Theory of Animation* (University of Minnesota Press, 2009) のような、メディア論・映像論的な分析に哲学的な考察を加えたものである。第三は、近年のというよりはやや「古典」に属するものとして、Susan Napierの*Anime from Akira to Princess Mononoke: Experiencing Contemporary Japanese Animation* (Palgrave, 2001) に代表される、文学のテクスト分析的な手法によるものである。

本書はこれらのタイプのいずれとも異なり、政策的・経済的な観点からのJPCの俯瞰図を示している。

JPCを「日本文化」としてではなく、より広く東アジア文化のなかに位置付けなければならないという問題意識は、すでに多くの研究者に共有されているところであろう。たとえば、Chris Berryらによる *Cultural Studies and Cultural Industries in Northeast Asia. What a Difference a Region Makes* (Hong Kong University Press, 2009) と、Daniel Blackstoneの *Complicated Currents: Media Flows, Soft Power and East Asia* (Monash University Press, 2010) のもとになったシンポジウム等は、ともに二〇〇六年に開催されたものだ。日本語で出版している著者のものでは、谷川建司と王向華らを中心とする「アジア・グローバル・カルチュラル・フォーラム」が二〇〇九年から毎年のようにワークショップを開催しており、その成果は日本語書籍だけでなく六冊を数えている。本書は、これらとおなじ知的トレンドのなかにありつつも、方法論において他の研究者が徹底しえなかったものになっている。

本書は第六章から成る。先行研究と対象・方法のフレームワークを示した第一章について、第二章ではポピュラー・カルチャーによる東アジアのリージョン化を論じている。そこで著者は、東アジアの都市の中間層という巨大な「マス」が動かすメディア・マーケットに着目する。

第三章は、その質を高く評価されるJPCを生み出した、国内の産業構造とマーケットを論じている。著者はJPCマーケットを支える存在としてフリーターとOtaku（この語には日本語の「おたく」が含意するようなネガティブな意味合いは少ない）を指摘する。新しい商品は、まず彼らに承認されないと、より広い購買層に紹介されることはないと言破する。またそうして発展してきた文化産業が、いまや日本政府の経済的・外交的エージェントに変化していることも指摘している。

第四章では、JPCが東アジア市場に拡散した状況と要因を、主に制作・流通側の観点から描いている。そこで著者は、海賊版がJPCの効果的な供給者になったと力説している。この説明は、評者のかねてからの主張とも共鳴するもので、まったくその通りだと思う。それにつづく第五章では、アイドル生産システム、異業種のタイアップ、テレビ番組の様式などの「フォーマット」が東アジアの現地のメディア産業に取り入れられ影響を与えたことを、六十八人の関係者へのインタビューからあきらかにしている。

全体をまとめた最終章では、東アジアのリージョン化は、産業側の働きでJPCが拡散したことによる、意図せざる結果だったと著者はいう。こうした論点は、JPC拡散への受容者の貢献に着目してきた文化人類学の知見とは、明確な対比をなしている。また著者が産業側の事情に目を向けたがために、大都市の巨大な

中間層という、国民国家を越えた点と点を結ぶ分析に重点が置かれ、JPCが東アジアの農村部にも「面」として広がっていることをみていないのではないかと指摘もあろう。あるいは、具体的な作品や作家のことが論じられていないではないか、という読者もいるかもしれない。しかし、著者が「語らなかつた」そうした諸点を追求することよりも、本書で初めてまとまった形で、英語で語られたことの大きさを評価したい。